

## 松岡秀明歌集『病室のマトリョーシカ』

# 鈴木陽美

## 多才な作者の多彩な作品

二〇〇七年、五十代になってから本格的に短歌を詠み始めたという松岡秀明さんの第一歌集。二〇一四年までの八年間の作が収められているが、習作期というものが無い。いきなりハイレベルの作品が生み出されていることに驚く。作歌を始めて数か月で応募した「解剖棟」で「心の花賞」の「倭万智賞」を受賞。二〇一〇年には「病室のマトリョーシカ」で「心の花賞」を受賞していることがその証明だ。

・マトリョーシカ分かちて終に現はるる虚をもたない小さき人形

精神科医の松岡さんが、ホスピスで出会った若い女性の持ち物としてマトリョーシカは登場する。入れ子式の人形はひとつがたゞ形代としてのイメージも持つようだ。  
・ 枯らし刈られしままに枯れてをり病棟中に草燻れさせ

「枯らし」「刈られし」「枯れて」とカ音でリズムを刻みつつ、結句で視覚から嗅覚へ焦点を交換させる。倒置法も効果的だ。技巧の冴えも初期からのもの。

・ 大腿骨その骨頭の球形の巧みなる弧に神見出せり

・ 解剖学学びし三十五年後に箸でつかめる父の橈骨

学生時代の回想を詠んだ「解剖棟」の作と父の挽歌を並べてみた。解剖学を学んだ者だから使える「橈骨」という医学用語が哀切に響く。このように医師としての視点で詠まれた作品が本歌集の中心をなしているのだが、そればかりではないところにこの歌集の大きな魅力がある。

・ 水槽の活け海老を選るわれに奴隷買付け人の眼力よ来い

・ すき焼には駒場東大駅前の宮代肉屋のランプしかない

・ 出刃菜つ葉中華肉切りそれぞれの光のなかで秋は更けゆく

・ ポブ・マーレーやや大きめにかけながらじやがじやが刻む深谷の葱を

料理愛好家は食材を選ぶ、道具を用意するところから真剣そのもの。松岡さんの料理は豪快で贅沢で何より美味しそうだ。

・ 水底にひそむ銀貨を探るごと子の手のひらはわれの手を撫づ

・ 松岡ハイジに子供会での役問へば「子供」と答ふ弥生朔日

愛情深い父親の歌。作歌のきっかけの一つが娘の誕生であつたらしい。その成長を温かいまなざしとユーモアが包む。

他にもサッカー選手、レコードコレクターなど多才な顔を持つ作者。作品は多彩で個性的な世界を見せてくれる。

歌集は「夏」「秋から冬へ」「春」という章題で三部構成となっている。各章に収められた連作のタイトルのつけ方がふるっていることにも触れておきたい。「八月の芝のピッチや清しづか」「病院のなかを駆け回り回つてもブラックジャックはどこにもぬない」など短詩として読めるものがまじっていて、作者の遊び心がうかがわれる。歌集のカバー画は、恒松正敏氏によるもの。幻想的なマトリョーシカ人形に見つめられながら、読者は何度も歌集をひもとくことになるだろう。